

平成 26 年度第 5 回理系チャレンジ講座を実施しました

平成 26 年度第 5 回理系チャレンジ講座が、平成 26 年 10 月 1 日、「今できる防災・減災を「まちづくり」と「ひとづくり」の視点から考える」をテーマとして、本学工学部准教授 小林祐司先生によって行われました。

遠隔配信された大分^{おぎの}雄城台・大分^{あじむ}鶴崎・安心院・臼杵・高田・三重総合・日田の 7 校(91 名)と、来学した大分南高校(16 名)を合わせて、計 107 名の高校生が受講しました。

小林先生は、今回の授業を始めに当たって、「自然災害が多く発生する我が国では、自然現象を正しく知り、そして備えることの重要性が、これまでの災害の歴史や経験から教訓として得られています。直近では東日本大震災、大分県では平成 24 年 7 月九州北部豪雨、海外ではフィリピンでの台風が大きな被害をもたらしたことが記憶に新しいでしょう。しかし、災害の経験や記憶は風化していくものです。その意識を風化させないために、今我々は何ができるのか、何をすべきなのかを、「まちづくり」と「ひとづくり」の視点から考えます。あわせて、建築コースにおける教育・研究の紹介も行います。」と受講生に問いかけました。そして、受講生に「そもそも何故災害が起きるのか」と質問をしました。台風や地震が発生しただけでは災害とは言わず、人的被害が生じたときや財産が破壊されたときにそれを災害と言い、災害の大きさは自然現象による「驚異」と、それが襲った「脆弱性」との関係で決まります。「大丈夫だろう」というバイアスはたらくと脆弱性が高まり、被害が発生してしまう。防災教育は、災害による被害を大きくする「脆弱性」を“最小化する最大の武器”であると説明しました。

「自分達の命は自分達で守る」、東日本大震災で見られた「釜石の奇跡」「率先避難者たれ」を例に、防災・減災ができないのはその地域に住む「人」の問題であり、行政はそこまで手が及ばない。高校生はもはや「助ける側」としてよく、今日からすぐにできる対策、非常食やトイレの対策、避難場所や連絡方法など、家族で話し合っ
て欲しいと呼びかけました。また、過去に起きた地震や津波のデーター、大分県の現状、巨大地震が発生した場合の被害想定などの資料を示しながら、先生が県内各地で取り組んでいる災害図上演習DIGについて紹介しました。学校や地域を訪問し、校内や近隣の防災マップを作るといったワークショップを通して、防災とはまさしく「まちづくり」であり「ひとづくり」であるという考えに至ったということです。

最後に、防災教育は子や孫の世代まで残ってはじめて「災害文化」と言えるのではないかと、問いかけ授業を終わりました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(97%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(98%)、「授業内容はわかりやすかった」(95%)、「板書(スライド)は適切だった」(92%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(95%)と高い評価結果がでました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(93%)、「映像はよく見えた」(93%)という結果がでました。受講生の具体的な声として、「自分の命は自分で守るというフレーズが、心に残った」「防災とは何をすればよいか、この授業でよくわかった」「建築と防災の関係、自分自身が考えなければならない」「先生の活動に興味を持った」など、多くの感想が寄せられました。

